慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	未来派とダヌンツィオ : マリネッティ著『神々の退場, ダヌンツィオ残る』について
Sub Title	Gabriele D'Annunzio und die Futuristen : F.T. Marinettis ,,Les Dieux s'en vont, D'Annunzio reste"
Author	Knaup, Hans- Joachim
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.54 (2017.) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20170331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

未来派とダヌンツィオ
――マリネッティ著『神々の退場, ダヌンツィオ残る』について――

クナウプ　ハンス・ヨアヒム

1. 始めに――鷗外「椋鳥通信」・マリネッティ・ダヌンツィオ

雑誌『スバル』に掲載された「椋鳥通信」[1] のなかで，鷗外が 1909 年未来派宣言の全訳を試みていること，それが当時はほとんど注目されず，3 年後讀賣新聞に高村光太郎が「未来派の絶叫」を掲載したあたりから，特に美術分野における「芸術の革命」として受容されるようになった経緯について，筆者はすでに前の論文[2] で触れておいた。未来派宣言の全訳が掲載された「椋鳥通信」の同じ個所で，その翻訳に先立つ形で，鷗外はマリネッティという当時日本ではほとんど知られていない人物の紹介もかねて，次のような文章を書いている――

> 伊太利詩人 F.T. Marinetti といふ先生は未來主義 (Futurismo) といふものを発表した。Cairo に住んでゐた伊太利人の子で，仏蘭西で育つたのである。仏蘭西語が上手なので，これまでの作は仏蘭西語で書い

凡例　本文中のルビに関しては，（ ）内は筆者によるもの，（ ）のない場合は鷗外によるものである。

1）森鷗外：椋鳥通信，鷗外全集，岩波書店，第 27 巻，1972 年，S. 14–15.

2）クナウプ　ハンス・ヨアヒム：「エーレンフリート・フォン・ヒューネフェルト―未来派を具現する貴族的飛行冒険家―」『ドイツ語学・文学』（慶應義塾大学紀要）第 53 号，2016 年，S. 43ff.

た。脚本には Le Roi Bombance, La donna è mobile などがある。D'Annunzio を攻撃した書には Les Dieux s'en vont D'Annunzio reste と題してある。[…][3)]

マリネッティの著作の紹介はさらに続き，それに連動するように未来派宣言の日本初訳の掲載が始まるのであるが，本論では，上記の引用の最後に触れられている「Les Dieux s'en vont D'Annunzio reste」というフランス語の著作を特に取り上げることにする。日本語に翻訳すると『神々の退場，ダヌンツィオ残る』という表題の書物である。パリの E. Sansot et C[ie] から 1908 年に刊行されているが，表題にあるようにそれはダヌンツィオに関わるものであり，「椋鳥通信」の中で鷗外は「D'Annunzio を攻撃した書」とはっきりと特徴を明示しているのである。

ダヌンツィオに関して，鷗外は「椋鳥通信」のなかで次のような記事を掲載している―

> 澳匈國（註：オーストリア＝ハンガリー帝国）公使伯爵 Luetzow と一しよに自動車に乗つて，餘り速度を出しすぎたので，Gabriele d'Annunzio は Siena の法廷へ呼び出された。判事はダンヌンチオといふ男は何ものだか知らないので，Pescara の本籍に問合せた。其回答書に云はく。「本人は一八六三年八月三十一日生の男子にして Francesco d'Annunzio と Benneditti 氏 Luigia とを父母とす。兵役義務は羅馬の騎兵聯隊に於て果したり。Gallese 公爵の女を娶りて，四子を設け，尋(つ)いで離別す。虹彩膜(こうさいまく)青く，頭に髪なし。品行順良にして人と争はず。財産なし。女子と犬と馬を愛す。職業は詩人なり。前科は決闘一回，自動車の速度過大なりしこと二回」[4)]。

3）森鷗外：a.a.O., S. 13.
4）森鷗外：a.a.O., S. 109.

鷗外はダヌンツィオの人物像によほど関心を持っていたようだ。上記の引用のなかで，ダヌンツィオの「本籍」があるペスカラに残る資料を翻訳する形で，この人物の特徴を簡潔に伝えようとしている。この資料の中で鷗外にとって特に興味深く思えた点は，ダヌンツィオの来歴や容姿，財産，趣向がコンパクトにまとめられているところ，特に「前科」の箇所でスピード狂の性向に触れられているところにあったのではないだろうか。このことは，鷗外が以下でダヌンツィオの「飛行機小説」にも言及している点と関連がある――

> 飛行機小説を D'Annunzio が書いた。飛行機 Velivolo を作つた Tarsis は姪婦 Isabella に迷つて清い Vana の愛を郤(しりぞ)ける。Isabella は情慾の為めに肉親の兄 Aldo と通じて Vana にこの汚らはしい恋を発見せられる。Vana はそれを告発して置いて自殺する。Isabella は発狂する。Tarsis は飛行機に乗つて空を翔(かけ)る[5]。

飛行機という，これまでのスピード感を根底から変えてしまう新しい移動手段を題材にしているだけでも，文学に関心を持つ当時の日本人の関心を強く引き付けたと思うが，鷗外がここで記述している当該小説の筋立ての面白さと共振して，話題になったようである。おそらく，小説のタイトルを知りたいという問い合わせが『スバル』編集部に来たのであろう。鷗外は次の「椋鳥通信」に，「飛行機小説を D'Annunzio が出したことは前に書いたが，其書名は Forse che si, forse che no である」という記事を掲載している[6]。

東京大学駒場キャンパス図書館で開催された展示「ダンヌンツィオとはだれだったのか？」の「開催記」に，次のような記載がある――「展示された 19 世紀末のフランス語版や英語版は，駒場図書館の一高コレクショ

5）森鷗外：a.a.O., S. 148.
6）森鷗外：a.a.O., S. 154.

ンに残されているものだ。鷗外の読んだ美しい装丁の戯曲『フランチェスカ・ダ・リミニ』ドイツ語版は，本郷の東大図書館鷗外文庫の一冊。鷗外もダンヌンツィオの作品から戯曲を「秋夕夢（しうせきむ）」というタイトルで訳している」[7]。

このようにダヌンツィオにたいする鷗外の関心は大変高く，それがその後の日本におけるダヌンツィオ受容に少なからず影響したことは間違いないようだ。しかし，そのような関心にも拘わらず，鷗外自身も言及している「D'Annunzio を攻撃した書」であるマリネッティの著作については，これまで日本ではほとんど注目されてこなかったようである。

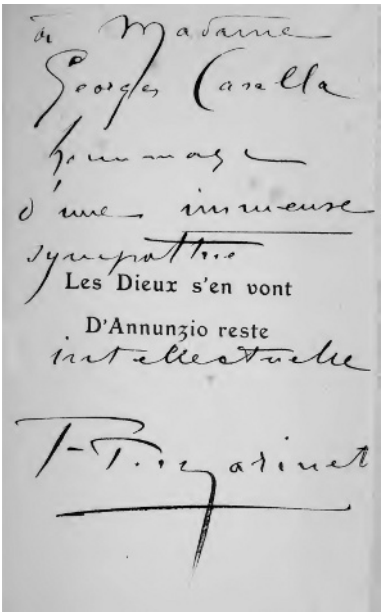
2.『神々の退場，ダヌンツィオ残る』初版本について――献辞と風刺

筆者は，日本の全国の図書館の蔵書を検索，あるいは直接連絡を取るなどの手段を講じたが，『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の原著を探しだすことはできなかった。鷗外が『椋鳥通信』に紹介しているくらいなので，筆者は日本にあるに違いないと思い調査を進めたのであるが，意外にもそれは的外れであった。『椋鳥通信』についての研究状況を詳しく知っているわけではないが，おそらく日本では詳細な文献学的な研究はなされていないのではないだろうか。最近岩波文庫から再版されたものを見ても，編者の好みで注が付けられているだけで，およそ文献学とは縁遠いもののように思える。このような事情で，筆者はこの本を求めて欧米の図書館を検索したが，複数の図書館で存在が確認されることとなった。特に，カナダ・オタワ大学図書館にはマリネッティの蔵書が比較的多く収められているようであり，筆者は同図書館から初版本に関わる資料を収集することができた。因みに，オタワ大学図書館にマリネッティのどの様な著作が収蔵されているかについては，その入手の経緯も含めての調査が今後必要であ

7）村松真理子：「ダンヌンツィオとはだれだったのか？――駒場博物館　秋の展覧会開催記」，『東京大学教養学部報』第 562 号，2014 年 1 月 8 日発行。

ると思われる。

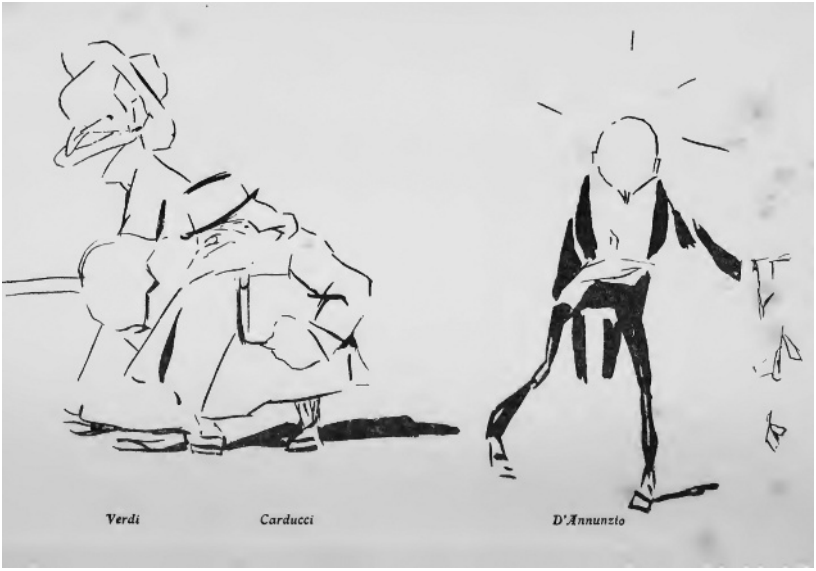
『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の紹介に入る前に，オタワ大学図書館に残る第7版（初版本と同じ1908年刊行）の体裁について少し見ておくことにしよう。本を開くと最初のページ（ページ数の記載なし）に，著者マリネッティの自筆の献辞が記載されている。まず，献辞を捧げた相手がCasellaという名前の女性であることが分かる。さらに，「測りがたいほどの知的共鳴を持って」という献辞の内容から，マリネッティがこの女性に強い共感を抱いていた様子も伝わってくる。この女性が具体的に誰であったかを確定することはできないが，当時有名なイタリアの作曲家Alfredo Casellaの近親者ではなかったかと，筆者は推定している。Alfredo Casellaは第一次世界大戦が始まるまでパリで生活しており，1923年にはダヌンツィオやヴェネチアのGian Francesco Malipieroなどと「現代音楽普及協会」を設立している。いずれにしても，この協会とマリネッティの関係，また仮にCasellaという女性がAlfredo Casellaに関係する人物であるにしても，「測りがたいほどの知的共鳴を持って」という献辞が生まれてくる背景を調べるには，さらなる調査が必要となり，その調査結果は別の機会に譲らざるを得ない。



資料1　Casellaにたいする献辞

ページ数のない2ページ目には，マリネッティのそれまでの著作一覧が掲載されている――

La Conquête des Étoiles, Poème épique『星の掠奪―叙事文学』



資料２　ヴァレリーによる風刺画

Destruction, Poèmes『破壊―詩集』
La Momie sanglante, Poème dramatique『血まみれのミイラ，劇詩』
D’Annunzio intime『親密なるダヌンツィオ』
Le Roi Bombance, Tragédie satirique『王ボムバンス，風刺喜劇』
La Ville Charnelle, 4e édition『肉体の都市，第４版』）

最初の二つの著作と終わりの二作はパリで出版され，La Momie sanglante, Poème dramatique と D’Annunzio intime はミラノで刊行されている。

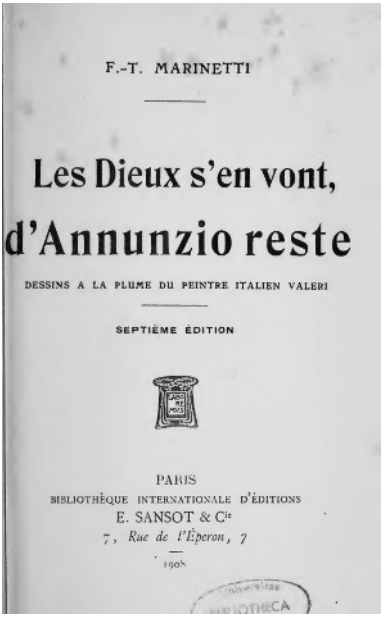
ページ数のない５ページ目の左側の画像には，帽子を被った二人の中年紳士が儀式ばった足取りで左手に向かって舞台から離れて行くように描かれている。画像の下に記載されている文字から，この二人は，オペラ作曲家のヴェルディとノーベル文学賞受賞者のカルドゥッチである。左腕に

は，二人のそれぞれの生業を象徴するものが描かれている。背の高いヴェルディはチェロのようなものを持ち，小太りのカルドゥッチは本のようなものを携えている。二人は，古めかしいフロックコートを身に着けている。風刺画のタッチ数は決して多くないが，世紀転換期の初めに亡くなった二人の表情からは，ある種の落ち着き，自分のこれまでの業績にたいする満足感のようなものが伝わってくる。

これにたいして画像右側には，落ち着きなく踊り回っている人物が描かれている。身に着けている燕尾服は，いかにも窮屈そうである。画像下の文字から，この人物がダヌンツィオであることが分かる。右手にペンのようなものを持ち，宙に浮かぶしわくちゃな紙に何かテキストのようなものを書こうとしており，左手からは小さなテキストの断片が休みなくあちこちにばら撒かれてように見える。これは，当時すでによく知られていたダヌンツィオの常軌を逸したような創作スピードにたいする風刺である。1900年から1905年までのあいだに，ダヌンツィオは詩行20000行を書き，演劇作品のために12000行の韻文を書いたと言われている。ダヌンツィオは猛烈な創作量を誇り，この数字を基に概算すると，40年間で2100万行の詩行や散文を書き，これは一日に1000行以上を書いていたことになり，前例なき記録であった[8)]。

しかし，この風刺はさらにもう一歩先に進んでいるように思える。二人の神々，つまりヴェルディとカルドゥッチの巨大な創作にたいして，ダヌンツィオはこの風刺画のなかで，ほとんど顔のない多作家として描写されている。特徴的な尖った顎鬚だけが，ここで描かれている対象がダヌンツィオであることを想起させている。ダヌンツィオは自己愛の強いエゴイストであり，ダンディを気取り，いつも中心にいないと気が済まない，何事にも敏感な男であった。ダヌンツィオの頭からは光線が放たれ，それは太陽のように世界を照らそうとしているように見える。しかし，画像をよく

8）Maria Gazetti: Gabriele d’Annunzio. Reinbeck bei Hamburg, Rowohlt 1989, S. 81 を参照。



資料３『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の表題デザイン

見ると，光は左側から来ているのである。それは，ヴェルディとカルドゥッチの影の方向から分かる。これにたいして，ダヌンツィオの影は小さく，貧相なものである。大きな影は，大きな影響や残り続ける作品のメタファーである。この風刺画は，この本でテーマとなる事柄にたいして，読者にあらかじめ著者の批判的な立場を伝える機能を持っていると言えよう。

6ページ（ページ数記載なし）には，本の表題の『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の二つの部分が，異なる文字の大きさで現れている。マリネッティは読者にたいして，はっきり目で見て分かるように「ダヌンツィオ残る」にアクセントを置いている。表題の上部のフランス語「Les Dieux s'en vont（神々の退場）」，つまりヴェルディとカルドゥッチの退場に対し，下部の「D'Annunzio reste（ダヌンツィオ残る）」が強調されている。これまでの風刺画との関連から，この強調が風刺性を帯びていることは間違いない。文字デザインによる巧みな戦略であり，この本の風刺的・攻撃的性格が文字の大きさを差異化することによって効果的に表現されているのである。

因みに，この風刺画を描いているのは，マリネッティと親交があったウーゴ・ヴァレリー（Ugo Valeri, 1874 ～ 1911）という画家である。ヴァレリーについては，小学館刊行『世界美術大事典 1』に記述がある。参考までに引用しておくことにする―「イタリアの画家，挿絵画家。詩人ディエーゴ・ヴァレリーの兄。ヴェネーツィアとボローニャの美術アカデミー

で学び，グリエルモ・チャルディと知り合って，影響をうけた。多くの風刺雑誌に，特色のある挿絵を描き人気を博した。作品には，アンソールやロップスの影響に加えた，ドーミエに特有の主題がしばしば用いられている。ミラーノの近代美術館に多くの作品が収蔵されている」[9]。ヴァレリーに関するさらに詳細な記述は，ライプツィヒで1939年から翌年にかけて刊行された『古代から現代までの造形芸術一般辞典』(„Allgemeines Lexikon der Bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart“) に見ることができる。この辞典で特に注目すべき点は，ヴァレリーの死因について「自殺」とはっきり銘記していることであろう[10]。1910年頃にイタリアで芸術家の自殺が頻発したことに関する研究書も最近刊行されている[11]。

資料4 『親密なるダヌンツィオ』の表紙

因みに，マリネッティによるダヌンツィオ批判は1903年に刊行された『親密なるダヌンツィオ』の中にすでに見ることができる。この本の表紙に掲載された風刺画にもそれは表れている。画の作者は，マリネッティの友人エンリコ・サケッティであり，自分の名声（月桂冠によって表象されている）に，靴を磨くようにひたすら磨きをかけるダヌンツィオの姿が描写されている。文学界に君臨するダヌンツィオのモティーフは，王座のよ

9)「世界美術大事典 第一巻」小学館，東京 1988，S. 222.

10) Hg. Hans Vollmer: Allgemeines Lexikon der Bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart. (Unveränderter Nachdruck der Originalausgaben Leipzig 1939 und 1940) E.A.Seemann Verlag Leipzig, 1999. 33. Band, S. 69.

11) Voglio morire! Suicide in Italian Literature, Culture, and Society 1789–1919. Edited by Paolo L. Bernardini and Anita Virga. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle 2013, S. 15.

うな立派な椅子にガウンのようなものを羽織って腰掛ている様子に投影され，靴の代わりに月桂冠を磨くことに集中している姿は，ダヌンツィオに対する痛烈な風刺になっているように思われる。

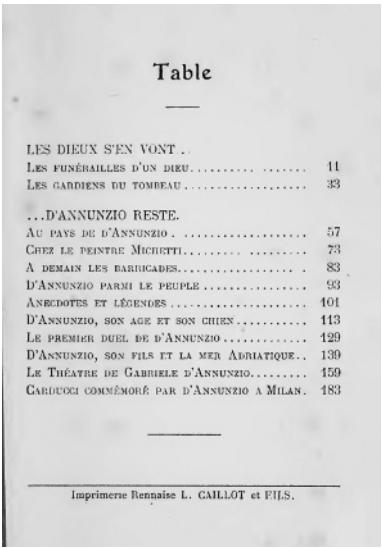
3.『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の構成と内容

それでは，『神々の退場，ダヌンツィオ残る』という書物の構成と内容を少し具体的に紹介することにする。この著作は新たに書き下ろされたものではなく，マリネッティがそれまで執筆した文学関連の論説を纏めたものであった。ここに集められた論説は 1903 年から 1907 年のあいだにフランス語で書かれ，まずパリやミラノのさまざまな雑誌に発表されたものである。

さて，資料 5 が『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の目次である。『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の第 1 部（11 頁 – 54 頁）は，新世紀の二人の歴史的人物の埋葬に捧げられている。二人の人物とは，イタリア統一運動（リソルジメント）の重要人物としてイタリア人から敬愛されている人物，つまり近代に生まれた二人の神々のことである。そのなかの最初の『ひとりの神さまのお葬式』（LES FUNÉRAILLES D’UN DIEU）は，二人のうちの一人である音楽家ジュゼッペ・ヴェルディを扱っている。ヴェルディはイタリア国民意識形成に傑出した役割を果たした人物であり，イタリア統一運動のなかで最も重要な芸術家であったことは，広く世界に知られている。ヴェルディは 1901 年に亡くなり，その葬儀は国葬であった。マリネッティもこの葬儀に参列しており，深く感動したという記録が残っている[12)]。二つ目の論稿『墓守』（LES GARDIENS DU TOMBEAU）のなかでは，イタリアで神と崇められる第 2 の芸術家，19 世紀終わりのイタリア文学で指導的な役割を果たしたジュゼッペ・カルドゥッチが扱われている。カルドゥッチは詩人，文学史家，ゲーテやハイネの翻訳者，さ

12）R.W.Flint Hrg.: Marinetti, Selected Writings. Farrar, Straus and Giroux. New York,1971, S.10.

らに政治家でもあった。1906 年には，イタリア人としては初めてノーベル文学賞を受賞している。没年は翌年の 1907 年である。



Table

LES DIEUX S'EN VONT..
LES FUNÉRAILLES D'UN DIEU..... 11
LES GARDIENS DU TOMBEAU..... 33

...D'ANNUNZIO RESTE.
AU PAYS DE D'ANNUNZIO..... 57
CHEZ LE PEINTRE MICHETTI..... 73
A DEMAIN LES BARRICADES..... 83
D'ANNUNZIO PARMI LE PEUPLE..... 93
ANECDOTES ET LÉGENDES..... 101
D'ANNUNZIO, SON AGE ET SON CHIEN..... 113
LE PREMIER DUEL DE D'ANNUNZIO..... 129
D'ANNUNZIO, SON FILS ET LA MER ADRIATIQUE.. 139
LE THÉATRE DE GABRIELE D'ANNUNZIO..... 159
CARDUCCI COMMÉMORÉ PAR D'ANNUNZIO A MILAN. 183

Imprimerie Rennaise L. CAILLOT et FILS.

資料 5　『神々の後退，ダヌンツィオ残る』の目次

『神々の退場，ダヌンツィオ残る』第 1 部は，ヴェルディとカルドゥッチの年代記が中心であり，若きマリネッティは華やかで自由な散文体をもって，作曲家ヴェルディと優れた詩人カルドゥッチにたいする心からの感動を表現している。マリネッティによれば，ヴェルディは「イタリアの偉大にして心広き歌人（うたびと）の魂」であった。しかし，マリネッティの関心が特に向けられているのは，二人のそれぞれの葬列の規模の大きさであり，そこにマリネッティは二人の芸術家の「偉大さ」と「国民的次元」の顕現を見ている。1907 年にマリネッティはカルドゥッチの葬儀に参列。カルドゥッチは政府大臣の要職も歴任し，国民のあいだで尊敬されていた。この葬儀にダヌンツィオは参列しておらず，オリーブの枝を送るに留めたことについて，マリネッティは厳しい批判を展開しているのである[13)]。

『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の第 2 部（56 頁 – 201 頁）は，第 1 部に比べてかなり分量が多くなっているが，そこでは全体が著名な作家ガブリエーレ・ダヌンツィオをめぐって展開している。世紀の変わり目から数年の間に，イタリアの文壇や芸術界を席捲していた偉大な人物二人が亡くなっていった。第 1 次世界大戦前の 10 年間のなかで国際的な名声を得ていたイタリア詩人は唯一人であり，それはガブリエーレ・ダヌンツィオ

13）Ibid., S.10.

であった。ダヌンツィオは亡くなった二人の神々の「孤児」として描写されることになる。マリネッティは，「偉大な詩人」に捧げたこれまでの多くの論稿をここに集めている。それは次のような構成なっている――

AU PAYS DE D'ANNUNZIO『ダヌンツィオの国で』
CHEZ LE PEINTRE MICHETTI『画家ミチェティ』
A DEMAIN LES BARRICADES『さらなるバリケード』
D'ANNUNZIO PARMI LE PEUPLE『人々のなかのダヌンツィオ』
ANECDOTES ET LÉGENDES『逸話と伝説』
D'ANNUNZIO, SON AGE ET SON CHIEN『ダヌンツィオ，老いと犬』
LE PREMIER DUEL DE D'ANNUNZIO『ダヌンツィオの最初の決闘』
D'ANNUNZIO, SON FILS ET LA MER ADRIATIQUE『ダヌンツィオ，息子，アドリア海』
LE THÉATRE DE GABRIELE D'ANNUNZIO『ガブリエル・ダヌンツィオの演劇』
CARDUCCI COMMÉMORÉ PAR D'ANNUNZIO A MILAN『ミラノのダヌンツィオ，カルドゥッチを不朽のものとする』

『逸話と伝説』のなかには，ダヌンツィオに関する数えきれないさまざまな逸話がまとめられているが，例えば，劇場経営における成功や失敗をめぐるスキャンダルなども，これら一連の著作のなかに含まれていた。ダヌンツィオの文学作品のなかには，『死の勝利』Il Trionfo della morte (1894)，『欲望』Il Piacere (1889)，『火』Il Fuoco (1909) などがある。マリネッティは，ダヌンツィオを詩人としてのみでなく，生活者としての側面も取り上げて一つの人物像を作る巧みさを見せている。それはあえて一言で言うならば，詩人としての社会的認知を利用して，無為，逸脱，プロ

パガンダのあいだをうまい具合にマネージメントする術を心得ている放蕩者ダヌンツィオという像である。『神々の退場，ダヌンツィオ残る』という著作は，ヴェルディとカルドゥッチの死によって象徴されているリソルジメント終結の文化状況と，デカダンスとベル・エポックの始まりの文化状況のあいだの移行を，ダヌンツィオを手掛かりにまとめることを意図している，と言えるのではないだろうか。

マリネッティは，同世代の若いイタリアの作家たちと同じように，13歳年上のダヌンツィオに対して複雑な感情を抱いていた。それは，感動と深い拒絶の間を行き交うものであった。同時代の若い同僚たちのなかには，憎しみのようなものすら抱いた者がいたようであるが，マリネッティの深い拒絶は，そのような憎しみとは異なるものであった。マリネッティは，創作活動の初期の頃，ダヌンツィオの作品の魅力に強く引き付けられていたが，次第に別の感情が優勢になり，それを押しのけてしまった。その感情とは，もはや時代にまったくそぐわない詩人のモデルは阻害要因にしかならず，そのようなものからは離れねばならない，という気持ちである。ダヌンツィオと対決するこの文学戦線におけるマリネッティの武器はイロニーと風刺であった。イロニーと風刺を武器に，ダヌンツィオの英雄像，デカダンスを具現するダンディ像を台座から突き落とそうとしたのである。

『神々の退場，ダヌンツィオ残る』はフランス語で執筆され，イタリア語には翻訳されなかった。それは，アルプスを挟んで北側の地域には，イタリアのこの重要な詩人をめぐる逸話や噂話を探し求める出版界の空気があり，そのようなヨーロッパの貪欲な状況を考えての措置であった。マリネッティの試みは，ダヌンツィオをイタリアの音楽界・文学界の二人の死した「神々」と比較しようとするものであり，その点で『神々の退場，ダヌンツィオ残る』は大きな成功を収めたのである。

4.『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の反響

『神々の退場，ダヌンツィオ残る』がパリで出版されたのは，未来派宣

言が『フィガロ』誌に掲載される 1 年前，1908 年のことであった。1910 年にダヌンツィオは財政逼迫のために，債権者から逃れようとフィレンツェからパリに移っている。フランス滞在のあいだ，ダヌンツィオは芸術界や思想界の重要な人物と会っているが，ダヌンツィオはマリネッティの著作や未来派宣言について発言することは一度もなかった。この点については，後に Antonio Gramsci も Leo Trotzki に宛てた書簡で触れており，この書簡はダヌンツィオ，マリネッティそして未来主義に触れている重要な書簡であるので[14]，機会を改めて紹介したい。

『神々の退場，ダヌンツィオ残る』は，刊行直後から多くのフランス語雑誌の書評欄などに取り上げられた。かなりの数の著名な作家は，マリネッティに直接連絡を取り，出版を祝う祝辞などを送っていたようだ。ところで，マリネッティは 1905 年にミラノで『POESIA』という雑誌を刊行しており，国際的な共同作業，特にフランスとの共同作業を活性化しようとしていた。『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の刊行直後の『POESIA』8 月号に，「『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の大成功」と題したトップ記事が掲載され，それはいろいろな新聞や雑誌に掲載された反響や，著名な作家の書評などを一つにまとめたものであった。この記事の見出しだけはイタリア語で書かれていたが，なかに収められているテキストはフランス語で印刷されている。このトップ記事は，雑誌全体 24 ページのうちの 5 ページを占めていた。1 ページ目は，特に『フィガロ』誌の編集長 Emmanuel Glaser の記事が占めていた。

これに続く記事には，雑誌『Action』のために作家 Gustave Kahn の書いた批評や，Charles Etienne がフランス語系スイス日刊新聞に書いた書評などがあった。さらに作家，政治家，有力者たちのマリネッティに宛てた個人的投書もあった。例えば医者で作家の Max Nordau，ベストセラー作家 Pierre Loti，スイス出身でフランス語作家の Edouard Rod などが顔

14）Antonio Gramsci, *Selections from Cultural Writings*, eds. David Forgacs and Geoffrey Novell-Smith, London 1985, S. 53.

資料 6　雑誌『POESIA』9 月号の表紙と反響

を並べていた。

これに続く『POESIA』9 月号のトップ記事の表題は，「『神々の退場，ダヌンツィオ残る』の凱旋」となっている。この表題の「Il trionfale successo」は，ダヌンツィオに対する一連の風刺的・批判的攻撃がついに勝利を収めたというメッセージを雄弁に語っているのではないだろうか。ページ数も 18 ページと大幅に増大されている。掲載された書評の数は 36 になり，しかもフランス，イタリアばかりでなく，ルーマニア，ギリシャ，ベルギー，ドイツの書評も紹介された。マリネッティ個人に宛てられた投書も 11 を数えた。つまり，1908 年後半期のフランスの文壇は，『神々の退場，ダヌンツィオ残る』一色に染まるほどであったわけである。ドイツだけでなく，フランスの文壇の動向にも関心のあった鷗外が『椋鳥通信』のなかで，マリネッティに関して，「D'Annunzio を攻撃した書には Les Dieux s'en vont, D'Annunzio reste と題してある」とわざわざ触れた背景には，このような事情があったのである。

ここまで書いてくると，それではダヌンツィオの方はどのような反応を示したのか，という関心が生まれてくることになるであろう。筆者が現在までに調べたところでは，不思議なことに，『神々の退場，ダヌンツィオ

残る』に直接ふれているダヌンツィオの発言や記録は確認されていない。ダヌンツィオは未来派の動向にまったく無関心であったのであろうか。このテーマに関しては，ダヌンツィオ関連の資料をさらに調査，分析した上で稿を改めて紹介したいと思う。